



「武士のめし」
家康と食にまつわる物語

静岡県中部地域局

・麻機沼の蓮根

静岡市葵区に広がる麻機沼では、ふっくらとして、汁は納豆のように粘り気が強い麻機蓮根が採れる。

漢方に精通していた家康は、特に上質な麻機蓮根と山芋を一对一の割合ですり潰し、それをごはんにかけて食べたという。その他に、この蓮根をすりおろした後にごま油で揚げるといった調理法で、滋養強壮、精力増進のために食べたと伝わっている。

(画像は参考です。麻機れんこんではありません)



・駿府城の実割り梅

駿府城には、七不思議と呼ばれる現象があったが、そのうちの 하나가『実割り梅』である。

実割り梅は、家康が自ら育てていたと伝わっている。



この梅の実は、手でたやすく二つに割れて、中まで食べられるため、重宝された。

家康亡き後、駿府城ではこの梅で梅干しを漬け、東照宮に納めるしきたりだったという。

明治時代に入り、梅の木の存続を憂慮した久能山東照宮の宮司が徳川慶喜と協議し、久能山に移植されて現存している。

(画像は参考です。実割り梅ではありません)

・一富士、二鷹、三茄子

1606年、家康が駿府に隠居することを決めた時、愛妾の某は、

「江戸は大都会の地なのに何故駿府のような小さな町に移られますか、理由が解りません」

と言上した。すると家康は笑って

「駿河には一に富士山がある、これは三国(日本・中国・天竺)の中でも随一の名山だ。見飽きることはあるまい。二に鷹が良い。三に茄子を名産として、他所より早々に食べられる。またすばらしく美味じゃ」

家康は、いつの世もこの三つすべてが吉であると告げたという。

また、この三つを夢に見れば、諸事大吉の始まりとなったという。



・岡の茄子

家康が大御所として駿府に在城していた頃、

「駿河の国で珍しい物があれば献上せよ」

と下知があった。そこで、現在の清水区岡地区に当たる下清水村では、地元産の茄子を献上したところ、大変喜ばれ、褒美として米十表が下賜されたという。

以後、この村では家康が亡くなるまで茄子を献上し続けたという。

・藤八柿

1600年9月、家康が関ヶ原の戦いに向かう途中、現在の藤枝市にあたる村の橋本藤八という者が、裏庭の柿を持参して家康に差し上げた。

家康は藤八を召して、

「見事な柿だが、なんという名だ」

と尋ねたところ、藤八は

「美濃柿と申します」

と答えた。家康は、美濃国（現在の岐阜県）の大垣城を攻める予定だったので、

「そうか、美濃大柿が既に手に入った」

と、縁起の良さに喜んだ。

「その方は藤八と申すか。では、この柿を以後、藤八柿と呼ぶがいいぞ」

と言って、意気揚々と美濃へ向かった。

家康は関ヶ原の戦いに勝利し、江戸に帰る途中に、また藤八のところへ寄った。

家康を迎えた藤八は、粗末な椀に粗食を盛って昼食を差し上げたところ、これがまた家康の好みに合い、錦の陣羽織と皮の袴を藤八に下賜した。藤八の家では、これらの品を家宝として大切に保存したという。



・広野の味知家由緒

家康が広野村（現在の駿河区）へ鷹狩りに出かけた際、昼食を家臣から献上された。この弁当がとてもおいしかったので、その家臣の屋敷に立ち寄ったところ、庭に一本の大きな柿の木があった。家康がその柿を食べてみたところ、大変おいしかった。弁当も柿もうまいことに感心した家康は、

「この家は今後、『味知（みち）』と名乗れ」

と言われ、今日に至っている。味知家に伝わるこの柿は、以後毎年9月17日に久能山に献上する慣わしとなった。

・長い目で栗の実を植える

家康が武蔵の忍（おし）城に在城していた際、家臣の伊奈備前守忠次に栗の実を授けて蒔かせた。伊奈忠次は内心『この栗が実って家康公が召し上がるまでには、何年かかるだろう。家康公がよほど長寿でなければならないだろう』と思った。

しかし年月が過ぎ、ついにその栗が実をつけて家康が召し上がることとなったので、伊奈忠次は家康の考えが遠大であることに感心し、

「すべて良いと思うことは、老いてもしておくべきだ」

と人々に語ったということだ。



・光明村の勝栗

1575 年 3 月のこと。

家康は、武田家の守る二俣城を攻めた。

その際、城の東にある光明寺の高継和尚が、城を攻めるのに都合の良い抜け道を教えてくれた。家康はその抜け道を使って二俣城を落とすことに成功し、上機嫌だった。

高継和尚はこの機会をとらえて、檀家の農夫たちに栗を献上するよう勧めた。

農夫たちは早速、かち栗（干して炒った栗）を作り、家康の陣に献上を申し出た。

家康は、

「これはなんという食べ物か」

と問うた。

農夫たちは、

「これは、光明山のかち栗でございます」

と答えた。

家康はにこにこして、

「光明山のかち栗とな。功名の勝栗に通じる、なんと縁起のいい名だ」

と喜び、いくつも食べた。

それだけでなく、農夫たちに褒美と名字を与え、顕彰した。

その後、この村の人たちは、毎年勝栗を家康に献上した。

それは江戸幕府が開かれてからもずっと、明治になるまで続けられた。

献上された勝栗は、江戸城の大奥で正月の祝の膳に乗せ、将軍に差し上げることが毎年の習慣になったということだ。

・林香寺の山椒

家康が由比方面に鷹狩りに出た際、林香寺という寺でひと休みすることにした。

「冷たい水を一杯くれぬか」

と、水を所望したところ、住職の天輪和尚は大きな器になみなみと冷水を湛えて家康に献じた。

家康がいざ飲もうとすると、水の上に小さな葉が浮いており、何とも言えない香ばしい香りがした。

「これはなんという草の葉じゃ」

と和尚に尋ねると、

「はい、山椒と申しまして、昔、開山禅師が唐に渡った際、蜀という国の西湖から携えてきたものを蒔いて得た物でございます」

との答えだった。家康は、

「これは珍しい物だ。毎年駿府と江戸に納めてくれぬか」

と命じたところ、和尚は



「はい、かしこまりました。」

と快諾した。

家康は林香寺に、十三石一斗余りの知行地と、山林竹木の諸役免除の朱印状を与えたということだ。

・家康と山椒

当時、浜松城に居た家康は、鷹狩に行った折、新原という場所にたどりついた。

そこに、家康が来るのを知って、地元の庄屋が出迎えた。

家康は、

「お前たちは年老いてはいるが、元気そうだな。何歳になる」

と聞いた。

「はい、私は今年百十五歳になります。せがれは八十六歳、孫はまだ六十二歳です」

「なんと、百十五歳か。しかも親子とも、長命で元気じゃのう。その秘訣はなんじゃ。なにか秘密があるのか」

「はい、この新原と申すところは、米が採れません。それで大豆・麦・ひえなどを作り、毎日それを食べております。おかずには、自家製のみそを焼きみそにし、山椒を添えて食べております」

「なに、山椒とな。山椒がよいのか」

「はい、山椒は香りがあるって食が進み、それに辛みがありますので胃の消化が良く、おかげで私たち一家はこのように長命かと存じます」

「なるほど、山椒はそんなによいのか。」

では、その実と苗を浜松城に届けてくれぬか」

「かしこまりました」

こうして家康は食事のとき必ず山椒を食べるようになり、長寿の一家にはお礼に米二十俵を与えたという。この話があつてからというもの、家康には各地から山椒が献上されるようになったということだ。



・渋茶の褒美

家康がさかんに鷹狩りに行っていた頃、早朝にしばしば、現在の静岡市葵区横田町を通った。

そのとき、いつも家の中を掃除している老人がいることに気がついた。

あるとき、家康はこの老人の家に寄り、小姓を通じて言った。

「お前は暑い日も寒い日も、毎日早く起きてかまどを掃除しているではないか。よくやるのうと感心しておる。

そのかまどで沸かした茶を所望する」

小姓が茶碗を差し出すと、老人は恐縮して渋茶を注いで差し上げた。

それを飲んだ家康は上機嫌で、

「なにか望みがあれば申せ、褒美をやろう」



と、小姓を通じて言った。

老人は、

「私は貧しい身ですが、ものごとに不足はございません。ただ、家の前をいつも車が往来するので、巻き上げられた土埃が麦飯について、砂をかむようでたまりません。また、寝ようと思っている時に車が通ると、車輪のきしる音で眠れません。どうか、これを止めさせていただきたいと思います」

家康は、早速横田町で車を引くのを禁じたということだ。

・駿府の茶町の由来

お茶を好んだ家康は、駿府城下町に茶の取引を専門とする町として、茶町を誕生させた。このことから、聖一国師の伝承のある安倍茶が、幅広く生産、販売されていたことが分かる。

茶町には安倍茶を商う問屋が集中していたが、1635年、この町から出火した火が駿府城に飛び火し、建造物の多くを焼失した大事件となった。

・お茶壺屋敷

井川大日峠には、家康に献上するためのお茶を保存する『お茶壺屋敷』があった。標高千メートルあまりのこの土地は冷涼で、自然の冷蔵庫として機能した。

秋の彼岸頃には、御茶道師範宗圓の手によって駿府代官所にお茶壺が運ばれ、『口切りの儀式』としてお茶壺が開封され、吟味された。合格すると、駿府城に運ばれて家康の飲用茶となった。

お茶壺屋敷から代官所までの道のりを、『駿府のお茶壺道中』と呼んで、お茶が大切に運ばれた。

また、茶壺そのものも大変高価なものだったため、侍が管理と警護の任に当たっていたという。

・鼻紙御朱印

現在の浜松市浜北区宮口に、大覚寺というお寺がある。

家康が従者を連れて宮口を歩いていたとき、急に喉が渇いてきた。

「喉が渇いたなあ。茶でもほしいなあ」

ちょうど、そこに大覚寺があった。

「小さな寺だが、茶があるといいなあ」

その頃の大覚寺は、お堂ひとつしかないような小さなお寺だった。

「茶をくれないか」

「はい」

年老いた和尚が、粗末な茶碗で茶を出してくれた。

「うん、うまい茶だ。もう一杯くれ」

家康は機嫌良く三杯も飲んで、

「和尚、何か望みはないか」

と問うた。

「こんな小さな寺で、難儀しております」

「よし、寺領を四石やろう」

家康は、懷から鼻紙を取り出し、寺領四石を与える旨を書いて、朱印を押して住職に渡した。
これが、『家康の鼻紙御朱印』として評判になったという。

・瀬名の梨

家康が現在の静岡市葵区瀬名で鷹狩りを行った際、喉が渴いたため、水を求めた。その時に近くに居合わせた源右衛門の妻が、もぎたての梨を差し出した。これを食べた家康は、そのおいしさに感銘を受け、以後その土地を『水梨』と呼ばせたという。

さて、家康は源右衛門に、

「褒美としてお前が歩いただけの土地をやるから、歩けるだけ歩け」
と告げた。

源右衛門は体が不自由だったが、がんばって歩いて数平方キロメートルの土地を手に入れたという。

こうして源右衛門は大地主となり、『渡邊』の苗字も与えられたということだ。



・有東木の山葵



1612 年 7 月に、有東木（うとうぎ）の村人が山葵（わさび）を家康に献上したところ、

「天下一品」

と褒め称えたという。

以後、有東木の山葵は、この土地から一切持ち出すことを御法度とした。

一説には、山葵の葉の形が徳川家の家紋に似ていることも、家康の心を動かした理由だという。

・次郎助池

かつての浜名郡可美村若林村には、広い池があつて、そこからは、鯉、鮒、すずき、ぼらなどがよく捕れた。

家康はそれを知っていて、若林村の山口次郎助のところへたびたびやってきては、魚料理を楽しんだ。特に、脂ののった『鯉』がお気に入りだったという。

「こんなうまい魚を他人に食べさせるのは、惜しいな……」

家康は、

「この池から魚を捕ることができるのは、次郎助だけでしょう」

と、漁業権を次郎助に限って与えることにした。

その後、この池は『次郎助池』と呼ばれるようになった。



・片身の魚

家康は、戦のため陣に詰めている途中で、おなかがすいてきた。とりわけ、急に魚がたべたくなってきたのだ。

「ああ、魚が食べたいなあ」

困った家来は、近くの池に行ってみてよく探したところ、ようやく一匹のすずきを生け捕りにして、家康の前に持参した。

「見事だな、まず片身をいただこう」

家康は家来にすずきの片身を切らせて、うまそうに食べていると、急に敵兵が押し寄せてきた。

「ここは逃げるが勝ちだ。この魚も逃がしてやろう」

家康は逃げながら、片身になった魚を池に放してやった。

魚は不思議と生きたまま、ひらひら泳いでいった。

その後、この魚は佐鳴湖の主になり、家来が魚を捕えた池は『片身の池』と呼ばれるようになったということだ。



・天下でうまいものとまずいもの

あるとき、家康は家臣とともに、今昔の合戦の物語を語り合った。そのついでに家康は、

「およそ食べ物の中で『うまい』というものはなんであるか、それぞれ申してみよ」

と話題を振った。各自がそれぞれ好むものを言い出したので、一つに決まる様子なかった。

家康の側室のお梶の方も、このとき傍らにおり、茶を煎じて人々に勧めながら、皆々がそれぞれ言い争うのを聞いて微笑んでいたのを家康が見て、

「梶は何を知って笑うのだ。もし、思いついたことがあれば言ってみよ」

と促した。

お梶の方は、

「およそ食べ物で『うまい』というものは、塩以上のものはありますまい。どれほど良い調理であっても、塩がなければ味はととのいません。また、万民も一日でも塩がなければ食欲を満たすことはできません」

と言ったところ、みないずれも手を叩いて驚嘆し、なるほどと感心しあった。

家康が、

「それならば天下で『まずい』ものはなんであるか」

と問うたところ、お梶の方は、

「『まずい』ものも塩以上のものはないでしょう。どんなにおいしいものも、塩味がすぎたまえば食べることができず、もとの味を損ねてしまいます」

と申し上げたので、家康をはじめとした人々は、お梶の方の聡明さに感心したということだ。



・冷酒清兵衛

家康は、関ヶ原の戦いにのぞむため、江戸を発し東海道を西へ向かった。現在の磐田市見付町のあたりで、街道の松並木の中で、酒を売っている者があった。

秋とはいえ、寒い日であったので、家康は酒で体を温めたくなった。

「熱燗にした酒をくれ」

しかし酒売りは、こう言って止めた。

「大将様、いけません。寒い日に熱燗を飲むと、酔いが醒めた時に余計寒くなります。冷酒を一杯、ぐっと召し上がると、後は暖かになりますぞ」

「なるほど、では冷酒をもらおう」

酒売りになみなみと注がれた酒をもらった家康は、ぐっと飲み干すと体が心地よくなってきた。

「酒売り、そなたの言うとおり、冷酒はよいのう。者ども、進め」

関ヶ原で大勝したその帰り、家康は再び酒売りの店に立ち寄った。

「おかげで戦に勝ったぞ。酒売り、名を教えてください」

「はい、清兵衛と申します」

家康は清兵衛を気に入って、城中に召し出しては碁の相手をさせた。

後に名字帯刀まで許し、武士として扱ったということだ。



・小豆坂と隠れ岩

1572年、武田信玄と光明山で戦った家康は、劣勢となって崖下の洞窟に逃げ込んだ。

勝った信玄は余裕で、近くの農家を訪ねて

「腹が減った。何か食べるものはないか。一番早く煮える物がいい。それをくれ」

と言った。

農家の主人は、小豆の塩煮を煮はじめたが、できあがるまでには思ったより時間がかかった。その間、武田方の追撃が止んだので、家康はこれを好機とばかりに洞窟から逃げ出し、無事に浜松城まで逃げおおせた。

それ以来、信玄が小豆の煮えるのを待っていた場所を『小豆坂』、家康の隠れていた洞窟を『隠れ岩』と呼ぶようになり、今も残っているということだ。



・小豆餅と銭取り

1572年、三方原の戦いにおいて、武田信玄に敗れた家康は、浜松城に逃げる途中で夕刻を迎えた。家康は朝から何も食べておらず、空腹で耐えられなかった。

ふと見ると道端に小さな茶店があって、おばあさんが小豆餅を並べて売っていた。

「これはうまい。食べたい」

家康は急いで馬から下りると、

「おい、餅をもらうぞ。ひとついくらだ」
と言うが早いか、もう食べ始めていた。

おばあさんが、

「はい、ひとつ三文です」

と言うと、家康は、

「そうか、むしゃむしゃ」

と五、六個食べてしまった。

と、その時、敵兵の声が近づいてくるのに気がついた。

「これは大変！一大事！」

とばかりに、家康は馬に乗って逃げ出した。

おばあさんはびっくりして、

「錢をくだされ！錢を！」

と叫びながら後を追った。

追いつかれた家康は、苦笑しながら錢を払った。

このとき、家康が小豆餅を食べた場所を『小豆餅』、錢を払った場所を『錢取り』と呼ぶようになったという。



・いとこ汁

家康がまだ幼少で竹千代と呼ばれていた折、駿府で『あつめ汁』を作ってもらった。

『あつめ汁』とは、小豆、里芋、焼き豆腐、栗、ぎんなん、だいこん、こんにゃくなどをみそ仕立てで煮た汁物である。

竹千代は、給仕衆に尋ねた。

「この汁の具は、一度に入れて煮るのか」

「いえ、豆腐のほかはすべていったんゆでておき、追々（おいおい）に入れて煮立てるものでございます」

竹千代は、

「甥甥（おいおい）ならば、いどこではないか」

と言って笑った。それ以降、あつめ汁のことを「いとこ汁」と呼ぶようになったということだ。



・雪の日に家臣と粥を分け合う

家康が鷹狩りに出た折、雪が降り出した。

家康は仮御殿に着くとすぐ、

「急いで粥を煮よ」

と命じた。

できあがった粥を自身で少し食べた後、残りはすべてお供の者に与え、

「これを食べて温まるように」



と伝えたので、誰もが家康の思いやりの深さに感謝し、温かさを感じたということだ。

・小粥(おがい)の姓

1572年、三方原の戦いにおいて、武田信玄に負けた家康は、今の浜松市中区曳馬町あたりに逃げたが、それはもうおなかがすいていた。

見ると、小さな農家が一軒あった。家康は思わず飛び込んで言った。

「おい、なにか食べるものをくれ」

農家の中では、おじいさんとおばあさんが栗の粥を食べている最中だった。

「お粥でもよろしいですか」

「おお、結構……」

家康は、鍋から椀に粥を移すのももどかしく、二本の箸ですするすと啜った。

「うまい、うまい」

家康は大変喜び、茶碗の上に二本の箸を並べて置きながら、

「御礼は何も持っていないが、少しのお粥をもらったことにちなんで、これからそなたたちは小粥(おがい)の姓を名乗りなさい」

と伝えて立ち去った。

それ以来、この農家は小粥の姓を名乗り、茶碗の上に二本の箸が置いてある様にちなんで、〇に二を書いた家紋にした。

その後、この家は、浜松藩から『東照権現さまにゆかりの家』として厚遇され、代々庄屋を務めたということだ。

・家康の三度栗

家康が、現在の掛川市浜野の辺りを歩いていると、不意に現れた敵兵に追われてしまった。

とにかく全力で走って逃げ続け、やっと敵兵を振り切ったと思うと、急に腹が減ってきた。

「ああ、ひどい目にあった……。腹が減ったなあ……」

ふと見ると、農家があった。家康は思わず

戸を開けて声をかけた。

「なにか、食べるものはないかい」

中にいたおばあさんは、びっくりしながらも、

なんとか答えた。

「はい、栗ごはんであれば……」

「いいとも、それをくれ」

家康が食べてみると、栗ごはんは実においしかった。

「うまい、うまい。こんなにうまいものは食べたことがない。このお礼に、一年に三度、栗が実るようにしてや



る」

家康はそう言うと、栗の実をひとつ、庭先に埋めていった。

やがてそこから芽が出た栗の木は、一年に三度ずつ実がなる不思議な木となったということだ。

・そうめん谷

戦いに敗れた家康は、真夏の暑い日に、数人の部下と一緒に逃げていた。

「どうにも暑いな……」

苦しくなった家康は、とある山の間の、木立の下で休んだ。休んでいると、朝から何も食べていないことに気がつき、猛烈におなかがすいてきた。

「腹がへったなあ。何かないかなあ」

すると、それを見ていた村人たちが、冷たい谷川の水でじっくり冷やしたそうめんを持ってきて、

「どうぞめしあがってください」

と献上した。

「これはうまさうな……なんという食べ物じゃ」

「はい、そうめんと申しまして、当地の名物です。

汁を付けてお召し上がりください」

家康は、早速食べはじめた。

「うまい、実にうまい」

家康は大喜びで沢山平らげ、礼を言って去って行った。

それ以来、そのあたりの谷を『そうめん谷』と呼ぶようになったということだ。



・家康と田中城

家康が江戸から駿府に引っ越してきた後、駿府城に京の豪商、茶屋四郎次郎が訪ねてきた。家康は非常に喜んで、

「近頃、京、大阪の様子はどうか」

と訪ねた。

茶屋四郎次郎は、

「皆落ち着いており平穏で、庶民は酒食の宴にふけて、日夜泰平を楽しんでいます」

と答えた。

家康が、

「庶民が酒食にふけるならば、定めし珍しい料理もあろう」

と尋ねると、

「このごろ京阪の地では、柏の実の油で『たい』の肉を煮て、その上に『にら』をすりかけて食べます。風味が良く、まことに結構です」

と、たいの天ぶらを紹介した。

さて家康が外出の折、特に気に入ってよく立ち寄ったのが、田中城であった。大好きな鷹狩りの際にも、田中城を拠点にすることがたびたびあった。

1616年、1月12日から田中城近辺で鷹狩りを楽しんでいると、1月21日の朝に久能の浜で捕れた『たい』が献上されてきた。家康は茶屋四郎次郎の言葉を思い出して、さっそく天ぷらにさせて食べてみた。

「うまい、うまい！」

家康はいつもよりも多く食べ、元気いっぱい鷹狩りに出かけた。ところがその夜、にわかに腹痛を催し、漢方薬と医者薬を飲んで、なんとか二十四日には駿府に帰ることができた。

その約三か月後、四月十七日に、家康は七十五歳でその生涯を閉じた。



・興津鯛

家康が駿府在城の頃、奥女中が実家から贈られたアマ鯛の干物をあぶって、家康の昼の御膳に出したところ、家康は

「味がよい」

と大変ほめ、

「この時期には毎年食べたいものだ」

と言った。

奥女中の名を興津の方といったので、この鯛を興津鯛というようになり、将軍家へ毎年献上することとなった。

ただし、実際に鯛が獲れるのは焼津近辺で、興津ではあまり獲れなかったということだ。

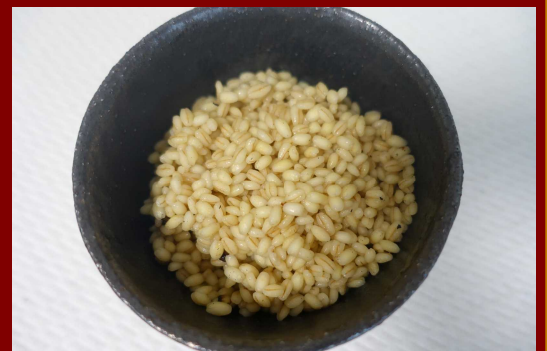


・家康と麦飯

家康の食事には、麦飯を出すのが常であった。ある日、近臣が気を利かせて、白米の上に少しだけ麦飯をのせて出したところ、家康はたちまち機嫌を損ねた。

「お前たちは私の心を知らないな。今、天下は戦争の世となって、上も下も寝食を安らぐことはない。そこで、我が身一人の食費も節約して、戦費に充てようとしているのだ。かえすがえすも私の心を知らない者どもだ」

と叱ったので、みな恐縮して御前を退いたという。



・麦飯の恩賞

家康は武田信玄に敗れ、逃げる途中でおなかがすいてきた。現在の浜松市東区竜光町のあたりで、農家を見つけ、

「腹が空いた……。めしをはやくくれ……」

と頼んだ。

農家の主人はすぐ、食べ残しの麦飯を出した。

家康はがつがつおいしそうにたいらげて、

「うん、うまかった。ありがとう。何か御礼をしたいが、望みはあるか」

と聞いた。

主人は、

「農家をしていると、色々な動員や役を課されるのがしんどくてなりません」

と言った。

「よし、今後この村は賦役御免だ」

それ以来、竜光村は動員や役を免除になったという。

・湯漬けと焼きみそ

焼きみそは、小さく平たいハ丁みその団子に、ごま、ねぎ、くるみなどを加えて丸め、炙ったもの。戦国時代から兵糧として、兵士たちが携帯していた歴史もある。

家康が家臣の大久保忠世の屋敷を訪れたところ、忠世の妻が、湯漬けに風味の良い焼きみそを添えてもてなした。

家康は大層喜んで、

「忠世の妻は世帯持ちがいいな」

と、ほめたということだ。



・朝比奈ちまき

現在の藤枝市岡部町の朝比奈谷に、清い水が湧く「ちまき井戸」があり、今も大切にされている。朝比奈ちまきを作る際に使う水は、この井戸から汲上げられている。

朝比奈の武士たちがこのちまきを食べると勇気百倍、いつ戦っても大勝したといい、陣中食に欠かせないものであったという。

朝比奈ちまきは日持ちが良く、食べると二日間空腹の心配がなかった。

そうしたことから、霊力を秘めた縁起物として今川家、武田家にも献上さ

れていたが、家康もその素晴らしさを聞き、献上を命じて、自らも食べた。

そのため、朝比奈ちまきは京都の「御所ちまき(天皇への献上品)」と並

んで、二大献上ちまきとして全国に知られた名物になったという。

そんな朝比奈ちまきも、時代の流れの中でいつしか作られなくなっていた



が、現在、朝比奈ちまき保存会の手により、当時の文献を読み解いて製法が判明し、復元されている。

また、朝比奈ちまき保存会の努力が実り、「地域の風土や歴史・風習の中で個性を活かしながら創意工夫され、育まれてきた地域特有の食文化」として、文化庁の令和三年度食文化機運醸成事業「100年フード」に、認定された。



・弥勒町の安倍川餅

慶長（1596年から1615年）の頃、安倍川左岸に、弥勒院（みろくいん）という名の山伏が開いた寺があった。この山伏が、安倍川の河原で旅人に餅を売っていたのが、安倍川餅の誕生の由来だという。

また、伝説では、家康が安倍川上流に位置する井川の笹山金山や梅ヶ島の日影沢金山などを御用金山とし、金の採掘を盛んに行っていた際、金山の検分に出向いた家康に、ある男が餅をつき「黄粉」をまぶして献上した。あまりに美味しかったので男に製法を尋ねると、「この餅は、金山から産出する金の粉が安倍川へ流れるのをすくい上げて、餅にまぶしてつくるので『金粉餅（きんこもち）』と申します」

と即答した。家康はこの男の機知をほめて褒美を与え、改めてこの餅を「安倍川餅」と命名したということだ。



・家康公の勝鬨餅（かちどきもち）

飴餅は、元々東海道の「間宿菊川」（現在の島田市菊川）と「日坂宿」の名物だった。

家康が関ヶ原の戦いへ向かう途上に食べ、『御開運の飴餅』と名付けたという。

この飴餅は、現在『家康公の勝鬨餅』と命名され、再現・販売されている。

（製法については、『島田市 勝鬨餅』で検索）



参考文献

- ・「家康からの贈りもの」中村羊一郎 著 平成21年 羽衣出版 発行
- ・「家康公の史話と伝説とエピソードを訪ねて」平成19年 黒澤 脩 著 静岡市観光課 編集・発行
- ・「家康の愉快的伝説101話」御手洗 清 著 昭和58年 遠州伝説研究協会 発行
- ・「家康公もお気に入り ふじのくに名物ガイドブック弐」静岡県文化・観光部観光振興課 編 平成27年 発行
- ・「現代語訳徳川実紀 家康公伝5【逸話編】家康をめぐる人々」平成24年 大石 学・佐

- 藤 宏之・小宮山 敏和・野口 朋隆 編著 吉川弘文館 発行
- ・「静岡市の史話と伝説」飯塚 伝太郎 著昭和 48 年 松尾書店 発行
 - ・「新版 駿河の伝説」宮本 勉 校訂 平成 6 年 羽衣出版 発行
 - ・「復元から未来へ」令和 4 年 朝比奈ちまき保存会 発行
 - ・「ふじのくに家康公 観光事典」平成 25 年 静岡県文化・観光部 観光振興課 発行
 - ・「ふるさとの味を知る おかざきの「食」再・発・見」平成 28 年 岡崎市食育協議会、岡崎市食育推進会議 発行
 - ・「ふるさと百話 3 巻」安本 博、大野 虎雄、若林 淳之、大房 暁、川原崎 次郎、関 七郎、藤田 清五郎、鈴木 勤一 著平成十年 静岡新聞社 発行



家康ゆかりの食べ物で
チャレンジ！



歴史！美味し！武士のめし！

提供店舗大募集！

- 
- ・無料で武士のめしの情報を提供
 - ・県ホームページ等で販売を広報
 - ・手数料等は一切不要

対象

静岡県内の飲食店・菓子店

■参加申込

下記電子メールアドレスへ、店舗名・住所・電話番号・ホームページアドレス・提供メニュー名と画像を添付の上、御送信ください。
なお、メニューと家康のゆかりの説明を、簡潔に御記載ください。

■「武士のめし」として使用可能な食べ物は、裏面を御覧ください。

■事業主体 静岡県中部地域局

電話番号:054-644-9124

電子メール:shizuokakentyubu@gmail.com

家康の伝承関連食べ物一覧表

※表に示された食材や食べ物を使い、かつ家康とのゆかりを説明できるようにし、示された条件をお守りいただく以外の縛りはありません。自由にアレンジしてメニューを創造し、顧客に提供してください。

※表以外の材料や調味料を使用することも、もちろん自由です。

※参加された店舗及びメニューは、「武士のめし」公式Instagramに掲載の上、静岡県のSNS等で広報いたします。

※家康の伝承を御覧になりたい場合は、右のQRコードをご利用ください。



No	名 称	カテゴリー	「武士のめし」参加条件
1	麻機れんこん	野菜	静岡県産品を使用のこと
2	梅の実	果実	可能な限り静岡県産品を使用のこと
3	折戸なす	野菜	静岡県産品を使用のこと
4	柿	果実	可能な限り静岡県産品を使用のこと
5	栗	果実	可能な限り静岡県産品を使用のこと
6	山椒	果実	可能な限り静岡県産品を使用のこと
7	茶	飲料	静岡県産品を使用のこと
8	梨	果実	可能な限り静岡県産品を使用のこと
9	生わさび	野菜	静岡県産品を使用のこと
10	鯉	魚	可能な限り静岡県産品を使用のこと
11	すずき	魚	可能な限り静岡県産品を使用のこと
12	塩	調味料	可能であれば静岡県産品を使用のこと
13	冷酒	飲料	静岡県産品を使用のこと
14	小豆の塩煮	料理	主な原材料に可能であれば静岡県産品を使用のこと
15	小豆餅	菓子	主な原材料に可能であれば静岡県産品を使用のこと
16	いとこ汁	料理	主な原材料に可能であれば静岡県産品を使用のこと
17	粥	料理	主な原材料に可能な限り静岡県産品を使用のこと
18	栗ごはん	料理	主な原材料に可能な限り静岡県産品を使用のこと
19	そうめん	料理	主な原材料に可能であれば静岡県産品を使用のこと
20	鯛の天ぷら	料理	主な原材料に可能な限り静岡県産品を使用のこと
21	鯛の干物	料理	主な原材料に可能な限り静岡県産品を使用のこと
22	麦飯	料理	主な原材料に可能であれば静岡県産品を使用のこと
23	焼きみそ	料理	主な原材料に可能であれば静岡県産品を使用のこと
24	朝比奈ちまき	菓子	もち米(白玉粉、又は上新粉)を使用し、できあがり笹の葉にくるむこと
25	安倍川餅	菓子	主な原材料に可能であれば静岡県産品を使用のこと
26	勝鬨餅	菓子	主な原材料に可能であれば静岡県産品を使用のこと



家康ゆかりの
食べ物がよみがえる！



「武士のめし」

伝承に記された家康の
食が、現代のアレンジ
を経て、提供開始！



主催
静岡県中部地域局



静岡県

中部地域局 地域課

令和4年度「武士のめし」事業

〒426-0075

藤枝市瀬戸新屋362の1

E-Mail chubu-chiiki@pref.shizuoka.lg.jp